消えた暴れ川「堀川」

加藤 龍之介
（2018年度　鈴木ゼミ2期生）

前回の「私の好きな京都」では堀川の二条城以北について取り上げた。今回はその下流、暗渠になっている部分や東寺付近の旧流路を調査した。私は暇があればGoogle Mapsで地図や航空写真を眺めたりしている。地上からではわからない変わった地形や建物を見つけることができ、遠く離れた場所でも瞬時に表示できるところが魅力だ。京都の街は上空から見ても碁盤の目になっているが、ところどころ斜めの道や曲線の道がある。障害物があったり市電を通すためだったりといった理由があるが、中には川が道路になったものもある。特に七条堀川交差点の南にあるS字カーブを描く小道を見て不思議に思い、この道や堀川について調べてみた。

現在の堀川は琵琶湖疏水の分線を水源とし、堀川紫明から堀川通を南下して、上鳥羽の大宮大橋付近で鴨川に注ぐ河川だ。二条城付近までは堀川水辺環境整備事業で親水公園化された開渠部となっている。だが、それ以南は暗渠化されており、近鉄上鳥羽口付近まで水が流れている姿を見ることはできない。暗渠化される前の堀川は、どこをどのように流れていたのだろうか。

鴨川へと注ぐ現在の堀川

二万分一假製地形図「京都」「伏見」(明治25年発行)によると、堀川は堀川通りを七条まで流れていたことがわかる。現在も残る西本願寺の堀を流れた後、右に逸れて1本西側を流れていた。川が暗渠化されたため、現在は普通の道路に見える。しかし、周囲と高さが異なっている他、JRとの交点に「橋梁」が存在するなど、かつて川だった痕跡がいくつか見られる。

東海道本線の堀川橋梁(大正3年8月竣工)　)河川改修以後の堀川は、近鉄東寺駅の少し北から近鉄に沿って真っ直ぐ流れるようになった。少し西にある碁盤の目に沿わないクネクネした道は堀川の旧流路の痕跡だと推測される。

堀川は現在の近鉄東寺駅付近で流路を西に大きく変えていた。屈曲部では水の流れが悪いため、大雨のたびに氾濫を起こしていた。

なぜ、堀川は流れを西へ変えていたのだろうか。ここで注目していただきたいのは御土居だ。豊臣秀吉は京都の街を外敵の来襲や鴨川の氾濫から守るため、天正19年(1951年)に

御土居と呼ばれる土塁を築いた。御土居は大きな土塁と堀がセットになっており、内側が洛中、外側が洛外と呼ばれていた。東寺付近の御土居の南端に当たる場所では、明治になっても土塁が残っていたことが地図から読み取れる。この地域には現在も「御土居」の地名が残っている。

そんな御土居の堀に堀川は流れていた。文字通りの「堀川」だったのである。

写真手前から流れてきた堀川は大きく右へ進路を変える

鳥羽高校付近で御土居は再び進路を北に変え、堀川と分かれる。代わりに堀川は北へ向かう御土居の西を流れてきた鍋取川と合流して南進を始める。それからしばらくクネクネと流れた川は、鳥羽水環境保全センター吉祥院支所の横で西高瀬川と合流する。現在でも鍋取川の跡には下水道化された鍋取川が流れているようで、現地調査中にも下水道をメンテナンスする職員の方の姿が見られた。現在の道幅が当時の川幅と一致するかどうかは定かではないが、狭い川幅と蛇のような形は洪水の多さを物語っていた。ちなみにだが、この鍋取川は西本願寺の北で堀川から分流されていた。

十条旧千本付近の堀川旧流路

昭和10年の京都大水害を契機に、東寺道以南の堀川は近鉄に沿って直線化され、川幅が広げられた。

堀川に疏水分線の水が引かれてくる前、平常時の水位はとても少ないが、大雨時は急激に水位が上昇していた。この原因は、合流式下水道から溢れた下水が堀川に流入していたことにある。合流式下水道とは汚水と雨水を１つの管で流す方式で、工事費が安く初期の下水道に多く採用された。だが、処理できる水の量を超えると、川などに汚水を流さざるを得ないという弱点がある。雨水で薄まっているとはいえ、汚水は臭いを放つ上に水質汚染に繋がる。また、極端に水量が増減する原因にもなっていた。

そこで、京都市は昭和61年から「年間放流汚濁負荷量を分流式下水道並みに削減する」という目標を掲げて対策に取り組んできた。その中に、堀川通りの下に管径6mの堀川中央幹線を整備するというものがある。従来の堀川にあった雨天時における下

水放流先の機能を、新設された下水管が担うことで、水質の改善と洪水の抑止を達成した。京都特有の傾斜のある地形を生かした下水管であり、堀川に親水公園を設置できるようになることで、離れていた人と川との距離も縮めた。

堀川の水を流すことができる西本願寺の堀

人々が日常の一部として使っている道も、川や治水の歴史が秘められていた。何百年も前に人間が作り出した地形も、時を経て現在の町並みや地形に影響を与えている。京都にはこのような「まだ知らない、知られていない川」の痕跡が山ほどあるのだろう。しかし、鴨川や桂川などのメジャーな河川は景観保全される一方、堀川などの町中の河川は文字通り「臭いものには蓋をされ」て姿を消している。堀川旧流路のように治水上の問題を抱えている場合もあるが、行政には小さな河川の保全を積極的に行っていただき、市民にも身近にあった河川についてもっと理解を深めていただければと思う。

〇参考文献

・迅速測図・仮製地形図の作成，日本の測量史，上西勝也，閲覧日：2021-01-04，<http://uenishi.on.coocan.jp/j670jinsoku.html>.
・堀川　旧流路，河の行方，Noriko，2007-12-19，閲覧日：2021-01-04，<https://kyoriver.web.fc2.com/report/river/horikawa/Horikawa_old.html>.
・京都の水辺の歴史的変遷と都市防災に関する研究，京都大学防災研究所年報　第47号B，萩原良巳・畑山満則・岡田祐介，2004年4月.
・京都市堀川中央幹線に関する調査研究，2004年度　下水道新技術研究所年報(2/2巻)，鈴木茂・稲毛順二，2004年.
・下水道ストック効果事例＜近畿，国土交通省，閲覧日：2021-01-04，<https://www.mlit.go.jp/common/001123644.pdf>.
・京都市における合流式下水道改善への取組，J-Stage，大楽尚史，2006年.